

日本個性化教育学会

発行

2018年9月8日

日本個性化教育学会報

発行責任者

第32号

加藤幸次

今年度の第11回全国大会は、東北の地仙台にある宮城教育大学を会場として、8月11・12日に開催されました。会員の皆様に、その報告を行います。

<第11回日本個性化教育学会・東北大会>

○テーマ「個が育つ授業づくりの探求」ー今、教師に求められる創造力ー

○期日 2018年8月11日(土)・12日(日)

○会場 宮城教育大学

○日程 1日目 8月11日(土)

8:30~9:00 理事会

9:30~9:50 開会行事

10:00~11:10 基調講演「これからの教育を担う教師にとって必要な力とは」
佐藤 真(関西学院大学)

11:20~12:30 講演「東北の地から全国へー個が育つ授業づくりと教師力の向上を目指してー」吉村敏之(宮城教育大学)

13:30~16:30 分科会・自由研究発表



<分科会A 1>

「資質・能力を育成する授業の創造」

コーディネーター 加藤幸次(日本個性化教育学会長)

実践発表 {生活} 石垣佐季(仙台市立名坂小学校)

{道徳} 須貝智恵(天童市立長岡小学校)

{算数} 浦郷 淳(佐賀大学教育学部附属小学校)

<分科会B 1>

「子供が自ら深める学習環境デザイン・ワークショップ」

コーディネーター 佐野亮子(東京学芸大学)

鈴木美佐緒(仙台市立荒町小学校)

<自由研究発表>

コーディネーター 藤本勇二(武庫川女子大学)

研究発表

1. 藤本勇二(武庫川女子大学) 館岡真一(新潟県上越市立飯小学校)
「聴き合う」授業づくりで学級集団と学力を育てるー「自分分かる」から「みんな分かる」ことに価値を見出す学級集団にー
2. 三沢敬正(長野県木曾町立三岳小学校)
少人数学級の条件を活かした学習指導
3. 松井香奈(大阪市立新高小学校) 藤本勇二(武庫川女子大学)
個のよさを生かし、互いに高め合うおもちゃづくり~2年生「大好き、わたしのおもちゃ」の実践から
4. 川島瑞記(仙台市立広瀬小学校)
子供の思い、くらし、学び、人をつなぐ総合的な学習ー仙台市立広瀬小学校6年2組「わかばの広場に観察池を作る」実践を通してー
5. 佐藤知美・守屋勇輝(仙台市立広瀬小学校) 近藤いずみ(仙台市野村学校給食センター・元広瀬小学校)
地場産の食材をふんだんに取り入れた献立の工夫

16:40~17:10 会務総会



○日程 2日目 8月12日(日)

9:30~12:30 分科会・自由研究発表

<分科会A 2>

「資質・能力を育成する授業の創造」

コーディネーター 加藤幸次(日本個性化教育学会会長)

実践発表 {中学・国語} 菅原香織(仙台市立加茂中学校)
{社 会} 山田麗圭(仙台市立片平丁小学校)
{国 語} 佐藤卓生(山形市立東小学校)



<分科会B 2>

「子供が自ら深める学習環境デザイン・ワークショップ」

コーディネーター 佐野亮子(東京学芸大学)
鈴木美佐緒(仙台市立荒町小学校)

<自由研究発表>

コーディネーター 浅沼 茂(立正大学)

研究発表

1. 人見修一(神戸市立小東山小学校)
一人ひとりが考えを出し合い、深め合う授業を目指して一授業開発と学級集団作りの現場から一
2. 藤本勇二(武庫川女子大学) 箱根正斉(西宮市立北六甲台小学校)
総合的な学習の時間におけるESDを通じた「資質・能力」育成の検討～小学校3年生が生き物に関わった2つの事例から～
3. 箱根正斉(西宮市立北六甲台小学校) 藤本勇二(武庫川女子大学)
深い学びの実現を目指した主体性を引き出す方策の検討～第5学年総合学習「北六米っこ物語」の実践事例より～
4. 伊藤静香(帝京平成大学)
教科化を踏まえた日本の小学校英語教育の現状と課題ー韓国の実践を通してー
5. コーシア郁実(教育コンサルタント)
EdTech(エドテック)の教育現場への導入に関する考察ー読解のためのデジタルテクノロジー教材を例としてー
6. 藤本研一(作文教室ゆう代表)
自己の再帰的創発作用としての自分史作成～ナラティブ・アプローチからの自分史作成の試み～



13:30~14:20 分科会シェアリング

A・B分科会合同での全体討論会

コーディネーター 加藤幸次(日本個性化教育学会会長)
佐野亮子(東京学芸大学)

14:30~16:30 シンポジウム

「今、求められる学校づくり、授業づくり」

コーディネーター 猪俣亮文(仙台市立榴岡小学校)

シンポジスト 奈須正裕(上智大学)
大谷敦司(天童市立天童中部小学校)
浦郷 淳(佐賀大学教育学部附属小学校)
齋藤浩平(仙台市立虹の丘小学校)

16:40~17:00 閉会行事

基調講演 「これからの教育を担う教師にとって必要な力とは」

佐藤 真(関西学院大学)

はじめに

本学会の今年のテーマは、「個が育つ授業づくりの探究 ～今、教師に求められる創造力～」である。私は、このテーマの中にある「創造力」に着目して、教師にとって必要な力とは何かを述べていきたい。私たちが何かを創造しようとするとき、自らの学問領域や実践領域から「越境」して他の領域に踏みこみ、自らのもっている知識と「関連づける」ことが大切になってくる。創造とは、新たなものをうみだす営みである。

さて、現在の学校では、「創造力」を育てる授業が行われているだろうか。例えば、歴史上の出来事が起こった年を暗記したり、人物名を覚えたりすることが重要視されていないだろうか。私は、これらの知識は歴

史の文脈の中で理解することが大切だと考えている。歴史は多面的に理解しなければならないからだ。このことは、他教科の学習にもいえることである。

一方、学校には職人の世界に通ずるところもある。かつて、松下村塾では「問答法」で授業が行われたという。塾生の自律的な姿勢とともに、彼らの吉田松陰への尊敬が基本にあって、松下村塾は運営されていた。現在の学校でも、すぐれたモデルを見て自分のものにしていく「真似ぶ」（まねぶ）文化があってほしい。自分から意識して、自律的にチャレンジしつづけることによって、「教員になる」ことができると思っている。

また、学習にあたっては、個性に応じた臨機応変的な指導が求められる。

登下校時の挨拶運動がパターン化しているのを見かけるが、子どもに寄りそった声かけをしたいものだ。授業においても「難しいことをやさしく教え」たり「やさしいことを深く教え」たりすることで、個に応じた学習を展開していきたい。

宗教改革と科挙

私は、16世紀の宗教改革は情報革命の側面を持っていたと考えている。印刷術の発明で聖書が印刷され、多くの人が聖書を読むことが可能になり、宗教改革につながっていった。しかし、同時に「読む、書く」の能力差が社会の階層化につながっていった。やがて、印刷術の発展により、学校教育では教科書を使うことが一般化した。チェコの教育者ヤン・アモス・コメニウス（1592～1670）は『大教授学』（1657）で、「専門化された膨大な知識を量的に蓄積しても、知識の体系にはならない」と述べている。コメニウスが出版した世界最初の教科書といわれる『世界図絵』は、単なる知識の断片ではなく、重層的な知の世界を構成しているのである。

一方、中国では960年の北宋の時代から1911年の清の滅亡まで、科挙によって官僚の登用がおこなわれた。科挙は、それまでの身分制社会を否定し、個人の能力によって官僚になれる文人政治を確立したという側面がある。明や清の時代には、人材養成機関として、国が学校の整備に力を注いだ。「人物養成・人物育成」と「人物選抜・人物採用」が、学校の基本的な目標であった。しかし、「人物養成・人物育成」という目標は見失われ、選抜試験のみが重視されるようになった。努力の過程は重視されず、結果がすべてであった。科挙の倍率は年を追うごとに高まり、30歳といわれる合格年齢まで、働かないで生活できる金持ち階級に受験機会が限定されるようになった。

「創造力」を育てる授業のために

以上、宗教改革と科挙について述べてきたが、どちらも一定の歴史的な意義を持ちながら、一方で大きな悲劇を社会にもたらした。制度が新たな格差を生み、社会のゆがみと分断を深めていくことになった。ここでは、その反省にたつて、私たち教師にとって必要な力とは何かを考えていきたい。

まず、私は、一人ひとりの子どもを大切にす学校・授業をつくっていききたいと考えている。社会には、答えのわからない問題が山積しており、私たちはこれらの問題に取り組んでいく必要がある。このような学びを授業で深めるためには、様々な知識・データを分類・比較し分析する、「学びの技法」が必要になる。また、学びのなかで、他とつながり、話し合い対話することが大切になる。答えを出すことは難しくても、自律的に考えを深めていくことが重要である。

また、自校の研究紀要に目をとおすことにより、現在までの経験をふまえ、スパイラル的に取りくみを高めていくことができる。大正新教育運動の中心的人物の及川平治や、奈良女子高等師範附属小学校で授業改造にとりくんだ木下竹次など、我が国の教育改革に取り組んだ先達が、私たちに伝えることも多い。

さいごに

私は、授業の中で子どもたちが他の子どもや社会とつながって、話し合いをしながら互いに学び、深めあっていくことが重要だと述べてきた。このことは、私たち教師にもあてはまる。個性化教育学会は、お互いに対話し、互いに批判しあい、恩師をも乗り越えていくような活動をめざしている。自律的に教育活動に取り組むことは、「越境」して、自己の知識を他の領域の知識と「関連づけ」、新しいものを創造していくことである。

（文責 神奈川 松本和平）

講演 「東北の地から全国へ 一個が育つ授業づくりと教師力の向上を目指して」

吉村敏之（宮城教育大学）

東北地方にはいろいろな財産がある。その一つが「綴方教育」である。綴方とは、今でいう所の作文である。文を上手に書かせるということではなく、文を書くことで、生活を見つめ、何が問題かを発見し、それを解決する方策を考え、生活を発展させる、みんなで共有するという教育である。文を上手に書かせるのではないので、単語の羅列のような駄文からも、その子の生活を読み取り、児童理解をする。そうした綴方を文集にして、それをもとに、まず秋田や山形など東北地方で教師も子どもも交流をして運動を起し、全国各地で交流をすることをめざしていた。

東北地方の「綴方教師」を結びつける役を担ったのは、鈴木道太（本名：銀一）である。宮城師範学校を卒業して、綴方教育に力を尽くし、1934年3月末に「宮城県綴方教育研究会」を作った。一方、広瀬小学校の教員7名は、菅野門之助を中心に、「生活を知り、生活を味わい、生活の仕方を学ぶ」綴方教育に取り



組んでいた。理論と実践を結びつけた教育が行われ、学校が子どもの生活する力を身につけるための一つの共同体となった。「校長のために仕事をしているのではなく、県のお役人のために仕事をしているのでもなく、私たちの仕事の対象は、子どもであるべきだと考えます。」このような話し合いを行う懇談会が日常的に行われた。1934年の3月には、学外者も交えた「綴方教育研究会」が作られた。

そして、1934年11月3日、広瀬小学校で「綴方教育研究会」が行われ、秋田の佐々木昂（本名：太一郎）と加藤周四郎が宣言文にて活動方針を示し、「北日本国語教育聯盟」が結成されることとなった。

そこで書かれているのが「生活台」である。生活台とは、人々の命を守る営みでのことである。厳しい寒さや、三陸の津波などの自然や東北を襲う飢饉。そして、地主からの抑圧、明治政府からの抑圧、東京の資本からの抑圧など。明治の日本の近代国家のゆがみを東北が一手に担ってしまっている。こうした封建的な圧政が70年の歴史を通じていつも被支配者の立場にあったという状況が北日本の「生活台」である。それが、現在の生活様式や意識状態にまで規制をかけている。

宣言文には、「我らが生活台に正しく姿勢する」ということが書かれている。冷害や東京の資本に飲まれてしまっている状況を正しく見つめるとのことだ。子どもの作文にある「貧しさによる苦しみ」とは、すなわち「経済的な苦しみ」が原因となっているのだ。生活台に正しく姿勢するとは、生活の事実を観察して作文に記述することではない。正しく見つめ、厳しい状況を生きてきた東北の子どもの持っているたくましいエネルギーをよい方向に向けるような教育をしよう。よりよい社会作りに向けていこうという意味である。その足場として、「北日本国語教育聯盟」を結成したが、北日本のみならず、東京でもどこでも、格差社会が存在するのだから、日本全国に働きかけると宣言している。

次に、鈴木道太先生（本名：銀一）の話を紹介する。鈴木は、苛烈な「生活台」に屈しない東北の人々の「生活力」を伸ばそうとした。すなわち、被支配の立場にあった東北の人々は、踏まれたり蹴られても生き続ける雑草のような生活力をもっている。人が人を支配する奴隷的圧迫からの解放、この解放の手立てを教える教育こそが、北方の教育である。そして、それに耐えてきた高いエネルギーをもって、生活の意欲を持ち、高く逞しい生活の文化を築き上げることである。北方地帯における生活的必要を満たす教育とは、小賢しい概念の習得でもなく、生活台の上に立って、生活を学び、生活をたかめていく意欲的な文化を身につけさせるものであると考えていた。

鈴木は、宮城師範学校を卒業後は、荒浜小学校、村田小学校、吉田小学校へと赴任する。1934年、鈴木が吉田小学校で高等1年生（現在の中学1年生）の担任をした時のことである。吉田小学校では、海沿いの浜の子と山側の丘の子とのケンカがよくあった。新学期開始から65日目にもケンカが起き、そのケンカをおさめる説教を鈴木がした。その中で鈴木は、学校で学ぶ意味は、自分ひとりが幸福になるのではなく、みんなが幸福になることだとして、勉強はそのための道具だと説いた。そして、さらに説き続けた。「ひとりの喜びがみんなの喜びとなり、ひとりの悲しみがみんなの悲しみとなる。そういう教室を、村を、日本を、そして世界を作りたい。」

こうして、東北では、個が育つ学級集団を組織することで、子どもたちの生活が高められてきた。まさに、個の生活にまで目を注ぎ、生活の発展にむけた教育を創造した、先人の財産である。こうした財産が未来を拓いていく。

（文責 東京 大野俊一）

<分科会 A 1・2>

「資質・能力を育成する授業の創造」

コーディネーター 加藤幸次（日本個性化教育学会長）



第1日目

【生活】「児童の思いや願いを生かした幼小交流」石垣佐季（仙台市立市名坂小学校）

第1学年の生活科でわかき幼稚園と季節ごとのあそびを中心とした交流を行った。グループや学級全体ではなく、一人一人の仕事、一人の園児の世話をしっかり学び、自分に責任をもたせるために4月に幼小の教員間で年間の確認を行うなど、準備に時間をさいた。一人の児童が一人の園児への関わりを大切にするために、児童と園児のペアを決めて1年間の交流学习を設定した。

「夏遊び」の後の交流会では、園児にプレゼントを持ち帰らせたいとの思い。「秋のお店屋さん」では、秋のおもちゃをつくって遊ばせたい。その次の交流に向け、園児がやりたいことを知りたいとアンケートを計画・実施するなど、相手意識の高まりがみられた。ふりかえりの質や表現力が向上し、子どもに主体的に学ぶ姿がみられたとともに、工夫点に気づくなど、思考力・気づきの質が高まった。

【道徳科】「単元構成をした道徳科の授業展開」須貝智恵（山形県天童市立長岡小学校）

子どもたちが道徳的価値について理解し、自分との関わりで捉え、それを自分なりに発展させていくためには、45分間の道徳科の授業だけでは難しい。そこで、子どもたちが道徳的価値に迫るために他教科等の複数の内容で単元構成することとした。道徳科と総合的な学習の時間の合科の単元「おたがいに分かり合うためには」では、考えたことをもとに総合的な学習の時間で、実践しようと計画したが、インフルエンザの流行などで活動までは進められなかった。その分話し合い活動を充実させることができた。言葉のずれ違いもあり、「寛容さ」の理解が難しい。「やりたいこと」と「どうしてもできないこと」の折り合いが課題である。しかし、相手の意見を理由まで聞くことの大切さを意識化できた。道徳科の教材選びや単元構成に時間

をかけた。道徳科の教材2つに総合2つそれぞれのねらいの整理をすることが難しかった。だが、複数の教材で単元を組んだことで、45分間では難しかった道徳的価値への自覚の深まりを感じることができた。

【算数】「資質・能力を育成する授業の創造」浦郷 淳（佐賀大学教育学部附属小学校）

算数科は、「数学的な見方・考え方」が働いているのかという点、つまり、「論理的、統合的・発展的に考える」という観点から見直す必要がある。数学的な見方・考え方を働かせ、算数科の本質を考え、理解する資質・能力を育成する授業を創造するポイントを①教師は、子どもの姿とともに学ぶことが必要である。②問題状況の提示の工夫が重要である。③算数の本質を考え、理解する問いかけを工夫できないか。の3点とした。

問題状況の提示の工夫により必要な条件は何であるか見極め、整理することができる。子どもの納得解と最適解は違うことがある。また、同じ答えでもその到達方法は違うことが多い。「論理的、統合的・発展的に考える」には、理由に着目し解決することが必要で、自分自身の問題解決につながる。答えが「どうしてそうなるか」と根拠を考えさせる設問を工夫することで論理的に考え、説明する力が付けられる。

これらの実践が算数科の本質を考え、より深い理解をすることにつながる。子どもの意見に対する教師の対応力が求められる。子どもの姿とともに教師も学ぶことが必要である。



第2日目

【中学・国語】「主体的・対話的で深い学びを実現するための批判的思考力の育成」菅原香織（仙台市立加茂中学校）

言語活動の質を高めるためには、「情報を多角的・多面的に精査し構造化する力」や「問いを立てる力」の育成が必要である。また、メタ認知を高めるため、学びを整理する場として、授業のふりかえりを充実させた。小学校で学習した教材を再度学ぶことで小学校の学習を想起させた。当時培った論理的思考力を発展させ、情報を精査し、解釈し、意味付けする。批判的思考力を論理的思考の上位概念にとらえ、物事を多角的に捉え、本質は何である

か見抜く批判的思考力を育成したいと考えた。

授業では、ちょっと立ち止まって思考する時間を意図的に設けた。新聞を読む機会を設定したり、思考ツールを活用したり、学びを整理するために授業のふりかえりの時間を意図的に設定したり、座談会を設けたりするなどして、思考力の向上を図った。また、一人一人の発言を取り立て、今ここにいていいんだと安心感をもたせるよう心がけた。座談会のVTRでは、生徒は、「自分の意見がいえるようになって、人の意見も尊重できるようになった」などと学びへ向かう力の変化を自覚していた。

【社会】「学び方を学ぶことを通して、自分の考えをもつ児童を育てる」山田麗圭（宮城県仙台市立片平丁小学校：H30年度仙台市教育センター長期研修員）

第6学年社会科「明治の国づくり」の授業を通して、日常生活から2つの資質・能力を高めたいと考えた。①事実や情報を整理し、比較、関係づけ、総合、再構成などの思考方法を駆使し、自分の考えを構築することを通して、物事を他面的、総合的に考える力。②課題に対してふりかえり、自分の言葉で自分の考えを表現する力。

課題に向かって考える楽しさ、協働して学ぶ良さを実感するために、意図して学びのツールとしてICTの活用、思考ツールやコンセプトマップの活用に取り組んだ。子どもたちは、考えることの楽しさを味わえた。子どもの考えたものから課題を作ることができた。自分の考えを表現できる力、資料のよさに気づき、資料を読みとる力がついた。

教師が教材研究を綿密に行い価値ある課題の設定をすることは、その後の価値ある学びに直結する。また、設定した課題を解決するためのよりよい方法を習得することで、選んだ根拠を解釈しながら自分の考えをまとめることができた。

【国語】「資質・能力を育むカリキュラムの基盤としてのスピーチ活動」佐藤 卓生（山形市立東小学校）

子どものスピーチの活動が子どもの経験にどのような作用をおよぼすかということについて研究を進めてきた。「意味や価値の生成・更新を意識化させる作用」「意味や価値の生成・更新を誘起させる作用」「意味や価値の生成・更新を持続させる作用」という3つの柱が学びを支えていると考えた。そして、その3つの柱と資質・能力の関係について、第1学年の子どもたちにスピーチを通して見つめ直した。

「体験」は、単なる断片として、無意識の領域に過ぎ去ってしまふ。その「体験」を言語化することで意味あることとして自己の内面に「経験」として位置づけられ組み込まれる（カリキュラム・デフラグメンテーション）。そして、「経験」そのものが耕される。自分の言葉で主体的・対話的な問題発見がなされ、思考力・判断力・表現力が発揮されると考えた。

授業には枠があるが、子どもには枠がない。子どもたちの姿を見ると、まさに主体的・対話的な問題発見がなされ、思考力・判断力・表現力が発揮されており、スピーチは、資質・能力を育むカリキュラムの基盤になり得る。



（文責 東京 太田 始）

<分科会B 1・2>

「子供が自ら学びを深める学習環境デザイン・ワークショップ」

コーディネーター

佐野亮子（東京学芸大学） 鈴木美佐緒（仙台市立荒町小学校）

分科会Bは、子どもが自ら学びを深める学習環境をテーマに、理論と実践事例紹介及びワークショップ形式による実技体験を通して、主体的・対話的で深い学びへといざなう教室空間について考え、手を動かしながら、学習環境への豊かなイメージが持てるようにすることを目指して行われた。

1日目の内容

分科会趣旨に基づき、1日目は前半に「知的好奇心を刺激し学びを深める学習環境」についての理論（背景にある考え方）と実践事例のレクチャーが行われた。この中で示された「学習環境構成」とは、物理的な環境がもつ力（レクチャーではアフォーダンス理論が紹介された）を教育活動に意図的・積極的に有効利用していくことであり、様々な学習環境の事例を見ながら、その教育的機能について考察していった。



後半は、学習環境を豊かにする方略や様々な創造的技法について知る、学習環境づくりのワークショップが行われた。子どもの作品や成果物は、掲示の仕方によって他の子どもの教材になったり鑑賞の対象になったりする。また、子どもの学習意欲を引き出すような課題の投げかけにおいても、掲示の工夫は材料の選び方や道具づかいによって効果が変わってくる。ワークショップでは、実際に様々な材料を使って、道具を試してみ、視覚的効果や利便性を実感し、参加者がそれぞれ現場に持ち帰られる具体的な情報提供が行われた。

会場には、事前にワークショップのための環境が設えられた。様々な材料や道具、掲示物や展示物が並べられ、眺めるだけでもワクワクするものであった。活動が始まると、参加者は自由に手に取って使い方を試したり、2学期から教室の掲示に役立つ物を作成するなど、和気あいあいの雰囲気の中でそれぞれに自分の手の動きを見つめ集中する姿があった。最後に各々取り組んだことや、作成したものを紹介しあう場面では「脳のいつもは使わない部分が汗をかいたようだった」「掲示物を作りながら単元の内容について結構考えているのが発見だった」「掲示物づくりは、見て知っているだけと実際にやってみるのでは全く異なることを実感した」などの感想があげられた。



2日目の内容

2日目の前半は、実践事例を通して単元構想や学習環境構成や授業づくりについて考え、情報交流が行われた。事例は、鈴木美佐緒教諭による1年・生活科「あそびのてんさい あつまれ！」（2011年度・広瀬小）である。この実践は、生活科の「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動」を軸に幼稚園児との交流を組み込んだ大単元で、長期にわたる学習活動の持続や子どもの意欲を支える学習環境構成に特徴がある。この実践事例を、単元構想や教室環境を含む学習環境の工夫、他教科との関連（カリキュラム・マネジメント）といった視点で分析したり、鈴木先生から具体的な授業場面や子どもの学ぶ姿の話聞くことによって、子どもが自ら学びを深めていく単元づくり、学習環境づくり、授業づくりに通底する思想と技について考察を行った。



後半は、前日に引き続き、学習環境づくりのワークショップが行われた。会場内の掲示物も活動が進むにつれ増えていき、参加者の成果物を掲示展示して一つのコーナーができあがった時は、みんなで創る楽しさの一片を味わうことができたように思う。

（文責 東京 佐野亮子）

シンポジウム 「今、求められる学校づくり、授業づくり」

コーディネーター 猪俣亮文（仙台市立榴岡小学校長）

シンポジスト 奈須正裕（上智大学教授）

大谷敦司（天童市立天童中部小学校長）

浦郷 淳（佐賀大学教育学部附属小学校教諭）

齋藤浩平（仙台市立虹の丘小学校教諭）

個を育てる学校、授業をつくるために、教師に何が求められるか。とりわけ、創造力をどのように身につけ、どのように発揮すべきか。学習指導要領作成にかかわった研究者、学校づくりをリードする校長、授業づくりをリードする教師、授業づくりによって成長する教師から、自身の事実を踏まえて意見を出し、これ

からの教師の在り方をさぐる指針とするシンポジウムであった。コーディネーター猪俣氏の言葉から始まった。それぞれキーワードを示しながら授業づくり、学校づくりの具現化について語られるよう要請された。

今、求められる授業づくり

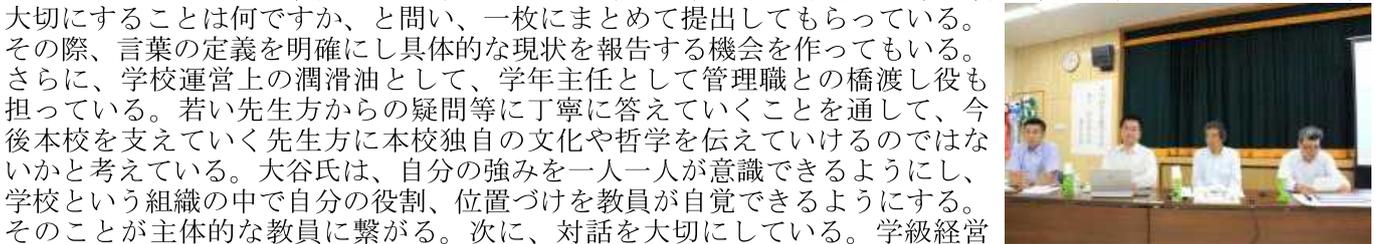
初めは、授業づくりから始められた。斎藤氏は、デザイン力をキーワードにカリキュラムマネジメントについて語られた。カリキュラムは子どもを中心に、子どもの言葉・姿を大切に、生活科を核に強い関係のあるものをつなげてデザインする（関連させる）ことが大切である。資質・能力の育成も絞って集中的にやることによって子どもが変わった。浦郷氏は、目的の明確化、主体的・対話的な学びの積み上げ、成果が実感できる場の設定をキーワードにあげ、現実世界の生活に根ざした問題を追及していく、子どもの文脈にあった授業づくりが語られた。大谷氏は、ダイナミックをキーワードとして、1時間に一人をターゲットとして見取るために、大きな単元を設定した。やってみたい、やれそう、いつもそうなんだ、使えるということまでいかないと授業は駄目である。知識・理解に止まっているは駄目で、思考・判断・表現力が相互に関係しスパイラルに作用する。その中から人間性にまで高められることが大切であると語られた。奈須氏より、細かいことはどうでも良い、学びの空間を広げることが大切である。授業は、進めるものではなく、子どもの疑問や思考の深まりが認められたら止める。進めてしまうと学びが深まらない。知識は思考や判断のために必要な物だけでよい。自在に考えられることが、学びの空間を広げることである。授業は、子どもの文脈で広げることであり、教師の文脈ではいけない。今まで、教師の文脈で授業が行われていることが多かった。これからは変えて行かなくてはならない。



その後、1時間の授業の中で子どもたちからいろいろな意見や考え方があがるが、一つの考えに統合することを教師から無理にすることはない。子どもが経験しながら統合していくことが大切である。そのためにもカリキュラムマネジメントが大切になってくる。これに関連して、赤で添削すると子どもはやる気をなくす。時々親のためにやっているのか、子どものためにやっているのか分からなくなることがある。赤で添削が少ないと先生は見えていないのではないかと親から誤解される。このような細かいことはどうでも良いが、親の理解を求めていくことは大切であると言うようなことが語られた。

今、求められる学校づくり

次に、授業づくりと関連して学校づくりに移った。斎藤氏からは、自分より年下の者や、経験人数の下の者が毎年入ってくることにより、年々状況が変わりつつある。経験7年目より研究主任として全体を動かすようになり、研究として何かやりたいと思うとき教職員との協働が必要になってくる。また、多種多様な子どもや保護者もいるので、共に育てていくという意識を共有するという協働も大切になってくる。浦郷氏は、ミドルリーダーとして、先生方に学級づくりの中で一番大切にするところ、自分の教科授業づくりの中で一番大切にすることは何か、と問い、一枚にまとめて提出してもらっている。その際、言葉の定義を明確にし具体的な現状を報告する機会を作っている。さらに、学校運営上の潤滑油として、学年主任として管理職との橋渡し役も担っている。若い先生方からの疑問等に丁寧に答えていくことを通して、今後本校を支えていく先生方に本校独自の文化や哲学を伝えていけるのではないかと考えている。大谷氏は、自分の強みを一人一人が意識できるようにし、学校という組織の中で自分の役割、位置づけを教員が自覚できるようにする。そのことが主体的な教員に繋がる。次に、対話を大切にしている。学級経営案は、一枚の紙に自分のやりたいことを書いてもらう。それを書き換えて行く、書き換えていくと授業の柱が生活・総合になってくる。また、職員室での先生方の話が、子どもの姿や授業のことになってくると、話の内容がカリキュラムマネジメントに高められていく。互いに得意な物を相談し合いながら研修を深めていく。奈須氏は、現在学校も教師も妙に忙しく、万事が後手後手に回って、新たな厄介が生じ、負のスパイラルに陥っている。研修も効果の上がないことを一生懸命にやっている。徒労感が蔓延し、研修が大変な仕事になってしまっている。徒労感が問題である。研修は確実に授業が上手になるような戦略が必要である。研修し授業が上達し、子どもが変われば徒労感が無くなる。



自分の学校にあったものを創っていくことが大切である。

最後に、奈須氏より、若い教員が増えている。初任者には、一緒に授業を作り具体的に教えてやるのが大切である。細かいことが重要である。本人が授業ができるように手取り足取り教える。授業の技術（発問・板書）などは具体的に教える。今度の指導要領は大変難しい、校内研修の中軸に据え、十分な時間と手間をかけ具体で確実にできるようにしていくことが必要である。そのためにも、どうでもよいことはやめる。学級経営案なども書式を埋めていくようなものは意味が無い。その学校に合ったものを作る必要がある。学校の様々な仕事を工夫し、省力化して、労働量を縮小していくことが必要である。

(文責 埼玉 多田信夫)

2017年度 日本個性化教育学会 会計報告

2018年8月11日

【収入の部】

(2018年3月31日締め)

項目	予算	決算	備考
個人会費	640,000	620,000	4000円×155
団体会費	21,000	21,000	7000円×3
繰越金	11,076	11,076	前年度繰越金
預金利息	0	0	銀行利息
免許更新・研究会	100,000	119,500	全国大会・春季研参加費
論文投稿料等	25,000	15,000	学会誌論文投稿料
その他		8,000	春季研書籍販売収益
合計	797,076	794,576	

【支出の部】

項目	予算	決算	備考
事業費			
全国大会運営費	100,000	100,000	全国大会運営補助費
春季研究会運営費	30,000	10,000	会場費・発表者謝礼等
会誌刊行費	450,000	383,052	会誌編集印刷・編集通信費等
広報活動費	170,000	157,047	会報発送・HP運営
事務費			
郵送・通信費	20,000	24,130	連絡通信等
消耗品費	20,000	5,863	印刷・文具等
諸費	7,076	10,216	弔電・手数料等
合計	797,076	690,308	

○差し引き残高 794,576 - 690,308 = 104,268

上記の通り決算報告いたします

会長 加藤 幸次
 事務局長 奈須 正裕
 会計部長 五十子 晴美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査 中澤米子 多田信夫 (印省略・・・会計監査承認ハガキを受理しています)

2018年度 日本個性化教育学会 会計予算案

2018年8月11日

【収入の部】

(2018年3月31日時点)

項目	内 訳	予 算
会費		
個人会費	4000円×150	600,000
団体会費	7000円×3	21,000
前年度繰越金		104,268
会誌論文投稿料		25,000
その他	免許更新・研究会	50,000
合計		800,268

【支出の部】

項目	内 訳	予 算
事業費		
全国大会運営費	夏の大会の運営	100,000
春季研究会運営費	会場費・発表者交通費等	30,000
学会誌刊行費	学会誌編集印刷・編集通信費等	400,000
広報活動費	会報発送・ホームページ運営	200,000
事務費		
郵送・通信費	連絡通信等	30,000
消耗品費	印刷・文具等	20,000
諸費	弔電・手数料等	20,268
合計		800,268

会長 加藤 幸次
 事務局長 奈須 正裕
 会計部長 五十子 晴美

第12回 日本個性化教育学会全国大会

開催地：兵庫県 会場：神戸国際大学

開催日：2019年8月10日(土)～11日(日)

併せて学会日程を含む必修講習と選択講習の免許更新講習を開催予定です。該当の先生方は、是非この機会をご活用ください。詳しいことは、後日お知らせいたします。

<事務局への問い合わせ・連絡先>

庶務部長 佐久間 茂和
 〒338-0013 埼玉県さいたま市中央区鈴谷 3-9-14-510
 TEL 048-678-1681
 e-mail sakuma.s@s7.dion.na.jp
 日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com/>

日本個性化教育学会
 2018年

第32号
 9月8日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
 編集 広報部 多田 信夫